

コトバを獲得する

高等教育院兼担 毛利 雅子

今回は、令和2年4月に人間文化研究科・人文社会学部に着任され、高等教育院の兼担教員である毛利雅子准教授に寄稿頂きました。新任の教員にとって本学の語学プログラムはどのように映るのか、前任校や民間企業での経験をもとに、率直なご意見をお寄せ頂きました。

なぜ 英語を学ぶのか

文系でもないのに、なぜ英語が必修なのか？英語以外でも外国語の単位が卒業要件になっているのはなぜなのか？総合大学であれば、このような考えを持っている学生は少なからずいるでしょう。就職に必要なだから、TOEICの点数さえ上がればいい、理系には英語は必要ないという声は、学生に限らずいろいろなところから聞こえてくるのも実情です。



ですが、本当に外国語学習は不要なのでしょうか？語学は文系だけのものなのでしょうか？（注：そもそも個人は、「文系」「理系」という表現は好ましいとは思っていませんが、ここでは便宜上使用させていただきます。）この観点から、本学で現在行っている語学プログラムを見つめてみました。

「英語を」ではなく「英語で」学ぶ

まず名古屋市立大学ランゲージセンターの語学プログラムは、語学を Global Citizenship 教育の一環として位置づけるという理念があります。つまり、単にコトバを学ぶというだけではなく、Global Citizenship 教育を目的としていること、そのために「語学」習得そのものが目的になりがちだったり、読解も興味がなかったり生活とかけ離れたようなトピックを扱うようなクラスと異なり、実生活・実社会に結びつくトピック、また自分の関心のトピックを選択できるというシステムは、学生にとっては自ら主体的に選択するということから、アクティブラーニングの第一歩だと考えています。

このように自分が興味を持つトピックで語学を学ぶという活動により、受け身の姿勢ではなく、トピック内容と語学との両輪で学ぶということは、学生にとって刺激的であるはずで、また実際、教員からの指導も外国語運用能力、また外国語で考える・読むというような主体的な指導ではなく、点数だけを目的とした小手先のテクニック指導になってしまえば、大学という高等教育機関の教

育ではなく、試験合格目的の語学学校と変わらず、学習中の発見や驚きといったものもなく、味気ないものになってしまうと考えています。そういった意味で、単に「英語を」学習するのではなく、トピックを選定して「英語で」学ぶシステムは、学生にとっても、教員にとっても刺激的だと考えます。

加えて、英語以外にも、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語、日本手話、ポルトガル語、ロシア語、イタリア語、アラビア語の10か国語のクラスが設置されていることにも、印象深いものがあります。非常に個人的なことですが、私自身が幼いころから音楽を学んでいたことで、ドイツ語、イタリア語、フランス語に親しむことが多く、英語以外の外国語学習を通して、言語間の関係に気づく機会になる、また言語を通しての文化理解も促されることを実感しており、語学教育・教養教育の点でも興味深いものだと考えます。

ツールから教養へ

以上は教員として感じたことですが、少し異なった視点から語学教育を見てみたいと思います。これまた個人的な話になりますが、私は大学・大学院からそのまま研究者の道に進んだわけではなく、民間企業・海外政府機関に勤務したのちにアカデミアに転じました。もちろん学生時代から語学は好きで得意でもありましたが、社会に出てみれば単に好きというレベルでは通用しません。語学・語学力はツールであり、教養でもあります。世間には「今時シェイクスピアを学んで何の役に立つのだ？」という批判がありますが、ビジネスの場ではリベラルアーツ、つまり教養が大きな役割を果たします。教養がないと見なされれば、足元を見られることに繋がります。競争意識を煽るつもりは毛頭ありませんが、これが社会の現実です。劇中の有名な台詞をベースにした記事のタイトル、企業 M&A を聖書の記述を用いて表記など、単にツールとしての英語（語学）ではない教養の落とし穴が潜んでいます。では、落とし穴に落ちないためにはどうすればいいのか。それはツールとしての語学と、教養としての語学の両面に気づき獲得していく必要があると考えます。

Global Citizenship を育む語学教育

さて、最初の問いに戻ります。外国語学習の必要性とは何か、という問いに対して、私は「世界への扉を開けるカギ」だと考えています。何かを知るためには、コトバが必要です。そこではツールとしてのコトバが求められますが、コトバには意味や意図が伴います。それが教養にもつながります。また、それを知っているか否かでは、自ずと入ってくる情報量が変わっていくのです。



語学学習には苦勞も伴います。知らない単語を覚え、馴染みのない文法や規則を学ぶことも必要になります。しかしこのような苦勞を超えた向こう側には、日本語だけでは知りえない世界が広がっていることも事実です。学生には、コトバを獲得することは、新しい世界に繋がるカギにもなるのだということを伝えていきたいと考えています。

事務局教務企画室より

『NCU 高等教育院通信』の最新号をお届けいたします。全学のFD活動や各部局における取り組み、旬なトピックスなど、“教育”に関する話題を広く皆様に提供していきますので、ご愛読いただければ幸いです。ぜひ取り上げてほしい話題などありましたら、下記までご連絡ください。

TEL: (052) 872-5804

Email: kyoumu_kikaku@sec.nagoya-cu.ac.jp